2019.7.30

大草正二郎

**人間は生きているだけで価値があるのかどうか？**

　人間は生きているだけで価値があるのかどうか。東洋大学の創設者である井上円了は、人間として生まれてきた以上、利他の精神で社会の役に立つことをしないでは存在する価値がないとまで言っている。公共に奉仕することが本来人間に求められる行為であり、そうすることで本人も満足を得ることができるというのである。自分の利益になることだけを行う「自利」だけでは、いくら大きな利益を得ても心が満たされることはないという。

　ということは、「利他」に繋がるようなことを何かしなければ人として生きている価値がないということになりはしないか？他人のために何もしないでただ生きているだけの人の価値を否定しているように見える。しかしである。これは、前提が間違っていて、他の人のために何もしていない人など一人として存在しないことに気付かねばならない。

　すなわち、私たちは皆一人で生きているわけではなく、人と人との関係の中で支え合って生きているのであり、生かされているのである。従って、人は、人と人との関係にある相手にとって欠くことのできない存在となっていることが容易に理解できるのではないだろうか。例えば、家族である。家族の誰かが病気で寝たきりになって自分では何もできなくなったとしても、見捨てたりすることはない。病気に倒れた家族の一員は、病気の治癒とは関係なく生きている限り他の家族に対していろいろな影響を与えている。他の家族は、その病気の家族を介護することで大きな満足を得ているともいえるのではないだろうか。一方、見方をかえると、病気の家族が、他の家族に満足を与えるような仕事をしていることになるのではないか。その病気の家族は何もできないが、他の家族に満足を与えるという重要な仕事をしていると考えることができる。

　このことを一般化して考えてみたい。ただ生きているだけの人も周囲の人との関係において、何らかの刺激を与える存在である。ただ生きているだけの病人がいるから、医者の仕事も介護士の仕事も家族が介護する仕事も存在するのである。言い換えると、病気の人は、医者や介護士の仕事を創り出しているのである。こういうふうに、社会の中の人と人との関係において、まさに生きているだけで大きな価値があるということができる。

　病人は、病気であることを通じて、医者や介護士や家族の役に立っていると考えられる。だから、生きているだけで価値があるといえると私は考える。「何もできない」は「何でもできる」に通じており、「生きる価値がない」は「生きているだけで周囲の人の仕事を創る価値がある」ということができる。そのような病気の人たちがいるからこそ、医者や介護士の仕事があるのである。ただ生きているだけで周りに何の影響も与えない人など一人として存在しない、というところにやっとたどり着くことができた。

　障碍者も同じで、家族がその障碍者の面倒を見るという仕事を障碍者自身が提供しているのであり、医者や介護士に対して治癒や介護の仕事をする喜びや幸福を提供しているとも言えるのである。健康な人には、全くできない種類の仕事を病気の人たちはしているのである。ここに大きな価値がある。だから、施設の寝たきりの人たちを一人として殺してはならないのである。生きているだけで金がかかり社会に迷惑をかけるだけの存在であると短絡的に考えること自体が大きな間違いなのである。

　ここ何日もずっと考えて来て、私がたどり着いた考えは、「人間は生きているだけで価値がある」ということである。少し大げさであるが、まさにコペルニクス的な思考の転換をすることができたように思う。（このことは、人を殺してはならないという理由に通じるものがあるのではないか。人と人との間に存在する人はその人間関係にある人を、その関係を一方的に断ち切ってよいという理由は全く見つからない。従って、人を殺してはならない理由の一つはここにあるのであろう。）

以上